「エレベーターという文化」

(3) エレベーターの時間

細　馬　宏　通*

【「充たされざる者」：エレベーターの長すぎる独白】

「エレベーターが昇りはじめてからも、老ポーターはずっと二個のスーツケースを持ったままで、力んでいるせいか顔が真っ赤になってきた。」……

最近邦訳がでたカズオ・イシグロの「充たされざる者」を読んでいたら、のっけからエレベーターのシーンで、しかもそれがあまりに長いのに驚いてしまった。

「もう何十年も昔のことになりますが、初めてこの職業に就きましたときには、いつもスーツケースを床においておりました。どうしても持たなければならないときにだけ、そうしておりましたのです。つまり、移動しているときにだけ。」……

エレベーターの中で、老ポーターが自分の生い立ちと街に起こっている奇妙な出来事を主人公に語る、というのが物語の始まりなのだが、そもそもエレベーターというのは悠長に生い立ちなどを語りうる場ではない。にもかかわらず老ボーイと乗客の会話は単行本で延々11ページに渡って続く。読んでいるうちにおかしな気分になる。こんなエレベーターの時間はありえない。いくらなんでもこんなに長い間エレベーターに乗っていられるわけがない。こんなことが起こりうる世界とは、いったいどこなのか？

非現実的でけしからん、と言いたいのではない。「充たされざる者」は、主人公がなぜ自分が街に来たか自分でもよく理解できぬまま、街の人々のことばに翻弄され、街をあちこち巡っていくカフカ風の物語だ。時間軸が無理矢理引き伸ばされたエレベーターでの会話は、むしろこの世ではない物語世界を示す導入としてふさわしい。

ところで、エレベーターの長い時間で始まる物語は、じつはこれだけではない。

【村上春樹、デヴィッド・リンチ：長すぎる時間】

村上春樹の「世界の終わりとハードボイルドワンダーランド」もまた、冒頭から主人公はエレベーターに乗っている。

「エレベーターはきわめて緩慢な速度で上昇をつづけていた。おそらくエレベーターは上昇していたのだろうと思う。しかし正確なところはわからない。あまりにも速度が遅いせいで、方向の感覚というものが消滅してしまったのだ。あるいはそれは下降していたのかもしれないし、あるいはそれは何もしていなかったのかもしれない。」

そして主人公は7ページ以上もの間、ポケットの小銭を数えなおし、いつまでたっても扉の開かないエレベーターの中でその理由を詮索しつづける。この不当に引き伸ばされた時間こそが、ハードボイルド「ワンダーランド」（不思議の国）への入り口なのだ。

同じような例は映画にもある。

「ツインピークス」で有名なデヴィッド・リンチ監督の初期作「イレイザー・ヘッド」には何度もエレベーターのシーンが出てくるのだが、なんといっても異様なのは、その時間の長さだ。冒頭、帰り道と覚しき泥道で、主人公の右足は泥に突っ込んでしまう。アパートに戻った彼は、

*（Hiromichi Hosoma）滋賀県立大学　人間文化学部講師

エレベーターに乗り、行き先ボタンを押す。しかし扉はなかなか閉まらない。ただ突っ立っているだけの主人公を、カメラはずっと写し続ける。ようやく閉まった扉から、昇って行くかごの光が漏れてくる。カメラはアングルを変えることなく、その様子も写し続ける。さらに内部で所在なげに立っている主人公にカメラは切り替わり、これまた写し続ける。

エレベーターの中では、なにも起こらない。起こる気配があるのに、起こらない。時間が引き伸ばされることで、ただ気配だけが濃くなっていく。

エレベーターを降り、部屋に帰った彼は泥で汚れた靴下を乾かす。彼の身には何も起こらなかったかに見える。しかし、よく見ると、乾かしているのは右ではなく左足だ。エレベーターに乗ることで、世界はこっそりと逆さまになっているのだ。

ここまで、冒頭にエレベーターが登場する代表的な作品をいくつか見てきた。奇妙な物語への入り口として、エレベーターはどうやら格好の装置らしい。しかし、なぜエレベーターなのか？そしてエレベーターの時間はなぜかくも長いのだろう。

【昭和初期のエレベーター：都市の駆動力】

大正末期から昭和初期にかけて、高層建築とともに発展していったエレベーターは、生活に速さをもたらした。エレベーターの駆動力に押されるように人々は目的地へ足を速めた。

この頃の小説を紐解いてみると、エレベーターを近代生活の駆動力の源泉として表わす一群の文章に出会う。

近代の都市がひとつの生き物であるなら、エレベーターはその生き物を動かす力だった。たとえば、昭和初期の新感覚派、横光利一の短編「七階の運動」の冒頭を見てみよう。

「**今日は昨日の続きである。エレベーターは吐瀉（としゃ）を続けた。チョコレートの中へ飛び込む女。靴下の中へ潜った女。ローブモンタントにオベラバック。パラソルの垣の中から顔を出したのは能子である。**」（横光利一「七階の運動」）

デパートメントの様子を活写したもの。能子、とは「ショップガール」の一人。潔い省略と軽快なテンポによって商品が綴られ、モボ・モガが流行した昭和初期という時代特有の速さが感じられる。「吐瀉を続けた」という言葉は、エレベーターの大量輸送ぶりを感じさせる。

「**紙幣行進曲に合わせてデパートメントは正午へと沸騰する。エレベーターのボーイは七層の空間を上ったり下ったりしながら、その日の時間を消していった**」（同上）

近代の消費生活を可能にするエレベーターの機械的な動きの繰り返し、繰り返しが生むリズム、リズムがもたらす速さ。この小説の最後では再び「**今日は昨日の翌日だ。エレベーターは吐瀉を続けた。**」と、冒頭の一節が繰り返される。小説自体もまた、言葉を切り、繰り返すことで、エレベーターに象徴される近代の速度に似ようとしている。

横光利一に続いて現れた芸術派文学の龍膽寺雄は「**東京の街々はまさに朝の満潮時です。**

ビルディングの窓々には一斉にスクリーンが払われ、甃（しゅう）路（ペーブメント）の人間の構図をおおかた吸い込んで、エレベエタアの昇降がピストンの様です。」

と、水のイメージを街路へ氾濫させる。そして近代という奔流をピストンのように駆動するのは、エレベーターだ。

都市が生きているように人もまた躍動している。同じ昭和初期に書かれた片岡鉄平の「生ける人形」は主人公がエレベーターを出たところで始まる。

「**七階、エレベエタアから廊下へ、そして瀬木は歩きだした。**

その時、瀬木はふと感じた。

『すこしおれの歩き方は妙だ』

廊下を踏む靴さき、それを腰に感じる、若々しい、軽快な感覚だ。近代の事務員らしい、新鮮な歩き方。「忙しい事それ自身が快楽だ」とでもくり返すように鳴る靴から、肩さきにまで伝わってくるリズムだ。」（「生ける人形／片岡鉄平」）

エレベーターによって初速をつけられたように歩き出す主人公瀬木は丸ビルの中にある興信所に勤めている。断髪で洋装のモダンな彼は、生活の速さ、繰り返しが生むリズムに合わせて

歩を進める。昭和初期の速度に憑かれた男だ。

【下降する時間】

一方、エレベーターの内部には、このような快活さとは対照的な、長い時間があった。たとえば無産者にとってのエレベーターはどうか。同じ「生ける人形」の別の場面を見よう。

「が、そのビルディングの中に入り、エレベエタアに乗った瞬間、（エレベエタアは必ずしも心まで高揚（エレベート）してくれる物ではない証拠に）彼女は急に打しおれてしまった。二階、三階、四階－彼女は次第に、資本家の前に身をさらす弱い自己を感じ始めた。」

辞めた会社に最後の給料を取りに行く女の心情を表した下り、舞台は同じ丸ビルだ。モダン・ガール、と心意気は近代でも、無産者の彼女はエレベーターの中で移り変わる自己を感じる。所作の欠けたエレベーターの時間が、よりどころのない彼女の気持ちを移らせる。無産の予感を抱えながら都市に生き、その不安がエレベーターの中で姿を表す。

やはり丸ビルを舞台にした、菅忠男の「発明家依田三良の結末」を見てみよう。興した発明商会が解散し二人で不動産屋を立ち去る場面だ。

「ＹＡＬＥの鍵を社員に渡すと、私と依田氏はエレベエタアに乗った。二人ともどこか深い深い底に落ちて行くように思われた。事実、依田氏の気持ちにはこのまま地の中にもぐって仕舞いたいとさえ、考えていたかも知れない。」
（「発明家依田三良の結末」菅忠男）

【どこにも行き着かない時間】

近代のエレベーターは単に垂直輸送を可能にし、都市の生活を速めただけではなかった。

階段なら足を動かしているうちに目的地に着く。しかしエレベーターの時間は、動作で埋めることができない。人は、からだを動かす必要のない、それゆえに長く充たされない時間を手に入れたのだ。

エレベーターの時間が長い、という感覚じたいは、不条理な物語の中にだけあるのではない。エレベーターが登場し、人々の生活にその存在が浸透していった今世紀前半から、都市のピストンとしてのエレベーターとは別のエレベーターを、所作のない沈黙で覆われた長い時間を提供するエレベーターを、個人は感じ始めていた。

しかし、無産者たちの感じている心境の下降では、「下降」という変化を感じているだけ、まだ時間が歩んでいる。

エレベーターの時間がさらに長くなっていくのは、こうした上昇下降という方向が消滅した、埋まらない時間に人々が気づくときだ。そして、そのような沈黙も、すでに昭和初期に現れている。

たとえば、先の「生ける人形」にはこんなエレベーターの場面もある。

「あれは誰か、と弘子に訊かれたら、素人下宿の細君ですと答えるつもりで、瀬木は弘子のいいだすのを待ったが、廊下でも、エレベエタアの中でも、彼女は黙っていた。」

エレベーターの時間は、ほんのわずかな沈黙を、虫眼鏡で見るように拡大していく。

どこへも行き着かないこうした沈黙は、しだいに「靄（もや）」とでも言うべき濃さを伴ってくる。

「私たちは、エレヴェーターで、八階から一階まで、一分の時間で降りていた。

高倉も、玲子も、微笑はしている。しかし前ほどに、はしゃいではいない。この落ち着いた二人の顔を前にして、何か云わなければならない言葉を、云いそびれている気持ちを味わった。だが、私は何を云ったらいいのか、この気持ちの靄をかきのけて。」（「丸の内の展情」浅原六朗）

近代のエレベーターは、まだ露骨な異界へわれわれを連れていくわけではない。しかし、人々はその中でことばを探しながら行く先を忘れ、そこが奇妙な空気で満たされつつあることに、すでに気づきはじめている。

＜つづく＞

参考資料

「充たされざる者」カズオ・イシグロ／古賀林幸訳／中央公論社　平成９年
「世界の終わりとハード・ボイルド・ワンダーランド」村上春樹／新潮社　昭和60年
新進傑作小説全集／平凡社　昭和４年
「吉行エイスケとその時代」吉行和子／斎藤慎爾編／東京四季出版　平成９年